

(旅の男が江戸口御門より、入ってくる)

番士 「おい、その方、この関所の中では笠を取れ！」

佐久三 「へ、へえ、笠でござえやすかい？こればかりは・・・先を急いでおりやすので、すいやせん！（と足輕の制止を押し切り進もうとする）」

番士 「待たれい。その方、高札の一つ目を読んでみい！」

佐久三 「へえ」一つ、関所を出入る輩 笠頭巾をとらせ通すべき事』ああ、そうでございやしたか！（と笠をとりですが、『お天道様が出ておる間は、死害線』と申すまやかしの光線が出ており、それを浴びると疫病に罹るゆえ、相撲はとつても、笠は取るな』とのあつしの母方のばあ様の教えがありやして・・・。）」

番士 「何をわけのわからんことを申しておるのじゃ。その方、怪しいのう。調べを行なう！こちらへ参れ！」

佐久三 「笠も取りやしたし、先を急いでおりやすゆえ、手短に・・・！」

番士 「(面番所にて) その方、関所手形を改める。」

佐久三 「へえ、ですが、お役人様、この関所で手形が必要なのは、女だけではございやせんか？ほら、あの高札の三つ目に『関より外に出る女はつづさに証文に引合(ひきあわせ) 通すべき事』とありやした。するつてえと、あつしの幼馴染のあかね屋の条七(くめしち) という男が申していたように、男は手形がなくても関所は通れる、てえことになりやせんかい？」

番士 「おお、その方の申す通りじゃ。この箱根の関所では出女を改めるのが主(しゅ)であるからのお。」

佐久三 「へえ、しかし、何で女には厳しいのでございやせんか？あ、もしや、お役人様の趣味でござえやすかい？」

番士 「馬鹿を申すな！出女と申すのはだな、全国の大名の各々の妻と娘を奉公人として江戸に住まわせておるのじゃ。」

佐久三 「奉公人というのは人質のことですか？そいつは、いつてえどうして？」

番士 「大名の妻と娘を奉公人、つまり人質として江戸に住まわせることによって、徳川の天下を良しとしておらん輩が謀叛(むほん)を企てんようにする為じゃ。して、その人質の妻と娘共が江戸から逃げ出さんようにこの箱根の関所で厳しく監視しておるのじゃ。どうじゃ、わかったか？後ろにおる者たちもご理解頂けたか？」

佐久三 「さようでござえやすか。てえことは、やはり男のあつしが手形を出す必要はねえのではござえやせんかい？」

番士 「それとこれとは話が違ふ・・・じゃが、そうまでして手形を出そうとせんのは、何か心にやましきことでもあるのではないのか？高札の五つ目にも『若し、不審のことあるにおいては、誰人(だれびと)によらず改むべきこと』と書いてあつたであろう！早よう手形を出さぬか！どうせ、手形を持ち合わせておらんか、持つておつても似非手形なのであるう？」

佐久三 「いえいえ、この通り、ね、ちゃんと手形は持つておりやすよ。どうぞ、ご存分にお改め下せえ(と手形を手渡す)。(番士の視線に気づき)・・・な、何でございやせんか？お役人様はあつしが不審者とても仰りたい・・・。」

番士 「男のくせに細かいことを気にするでないわ。それとも、おぬし、実は女か？」

佐久三 「あつしが女？な、何を、藪から棒に！あつしは見ての通りのむさくるしい男でござえやす。」

番士 「ん、まあよい・・・(手形を見ながら)・・・その方、名を名乗れ。」

佐久三 「へえ、江戸、日本橋、あかね長屋佐久三でござえやす。」

番士 「さく・・・ぞう？・・・うんうん！」

佐久三 「さ、佐久三でござえやすが、何か？」

番士 「その方の、旅の目的は何じゃ？」

佐久三 「お伊勢参りでござえやすわよ。」

番士 「ん、ござえやす、わよ？」

佐久三「あわわ、き、緊張のあまり、あ、いやいや、実はあつしには姉が二人おりやして、幼い頃より女の中で
過ごして参りやしたゆえ、女口調は自然と馴染んでおるわけでござえやすわよ！あわわ、また！」

番士「ふふん、これで決まりじゃな！その方、やはり女であるな！関所を通るために女が男の身なりをしておる
な！」

佐久三「えーっ？いえいえ、何をおっしゃっておるのやら、おたわむれが過ぎましようぞ……。あつしはう
そ偽りなく男でございやす！」

番士「実はかような人相書が届いておるのじゃ（と人相書を見せる）。江戸に奉公に出ておった『さく』という女
が一日、江戸を逃げ出したと記しておる。加えて、右目に黒子（ほくら）あり、右手にて左耳を触る癖
あり、と記してある。昨日より、この『咲』を搜索すべく作戦を模索しておったが、むやみやたらと詮索（せ
んさく）し過ぎたせい、情報が錯綜し、サクサクとお縄を頂戴する思索（しさく）で、防護柵まで作成した
が、いまだ柵にも網にもかからん。このままでは、末までの恥！万策尽きたかと思っておったが、そこ
に上手い具合にこの佐久三が現れおった。少々強引ではあるが、この男を『咲』にでっち上げればわしの
株もあがるというもの！ふっふっふ！我ながら傑作じゃ！ふっふっふ！」

佐久三「何をでっちあげるんでげすかい？」

番士「おっといかん！おぬしには関係の無いことじゃ！それでじゃ、おぬし、この『さく』に相違ないな！『さ
く』が男の変装をして、佐久三を名乗り、この箱根の関所を通るつもりでおったな！」

佐久三「さく？確かにあつしの名前『佐久三』と似ておりやすが、まったくの人違いでございやすよ！黒子（ほく
ろ）も、かような癖もあつしの物心つく以前からあることとして、偶然その咲って女と同じなだけでござ
えやすよ！」

番士「男として、上手く立ち回れておるつもりであろうが、そうは問屋がおろさん。話し口調も立ち振る舞いも
よくよく見れば、女々しく、わしははなから怪しいと思うておったのじゃ！観念せい！」

佐久三「お役人様、長げえ間この関所に詰められて、性根が捻じ曲がられたのではござえやせんかい？」

番士「たわけ！人見女のお福、この者の股間を改めよ！」

佐久三「ええ？股間でござえやすかい？」

番士「（面番所内に向かつて）……。人見女のお福！お福！……。改め婆！ばばあ！」

（人形を見て）

番士「なぜか、かように固まってしまっておる、なので……。（お客さんに拡大鏡を手渡し）あなた、代わりにこ
の者の股間を改めて下さい！（お客さんに向かつて）どうじゃ？この者は女であるな？」

（お客さん、何かしらリアクション）

佐久三「ええ？確かに……。それほど立派ではねえでげすがうそ偽りなく男でござえやよ！……。（周りを見渡し）
あつ、この旅のお方と昨晚旅籠にて寝起きをともししたのでござえやすが……。あつしは確かに男でげす
な？」

番士「ええい、わしの目に狂いはないわ！おぬしは、江戸より姿をくりました『咲』に相違ない！それに、この
手形は似非手形ときた！このままこの関所を通す訳には参らん！この者をひつとらえ、獄屋へ連れて行
け！であえくであえく！」

佐久三「ななな何で！あつしが！」

番士「そうであった、なぜか奥の役人も全員動かなくなってしまいおった。仕方ない……。（とお客さん）。四の
五の言わずにしばし獄屋に入っておれ！後ほどじっくり取調べを行う！覚悟しておれ！」

（男、お客さんに連れて行かれる）

佐久三「そんな、理不尽でござえやすよ！ここの役人はとち狂っておる！畜生！助けてくれ！」